

## 提 言

がん患者を親にもつ子どものグリーフケアへの  
意識向上と地域で支えていくことの重要性The Importance of Grief Care for  
Cancered Patients' Children and Local Support

小島ひで子 (修文大学看護学部看護学科教授/北里大学看護学部客員教授)

近年, がん対策基本法において緩和ケア推進の方向性が明確になったが, 増え続ける若いがん患者の死により, 親の喪失を経験する子どもへのグリーフケアは家族ケアの一環として医療者が取り組むべき課題と考えている。2008年厚労省支援事業にて親ががんになった子どもの支援として Hope Tree が設立され, 海外の専門家を招聘し研修など積極的に活動し, その学びを意識の高い実践家が各施設等で展開している。しかし多くは, 各施設の認定・専門看護師や MSW が個別に対応しているのが現状であり, 子どものグリーフケアは遅れている分野である。さらに, 子どもの予期悲嘆は, 身体的・精神的症状が出現しない限り, 医療システムにおいてケア対象となることは少ない。



北米では, 親のがん告知から死別後への継続した子どものグリーフケアプログラムが多数実施されている中, 私が研修した「Bereavement Family of Ontario」(カナダ) のビリーフメントケアを参考に, がん患者を親に持つ子どもの予期悲嘆への介入の結果, 幼児期でも, 親の喪失以前から病状説明がなくても, 親の病状進行や薬物の副作用による体調不良, ボディ・イメージの変容, それに伴う日常生活の変化を通し, 親の喪失への予期悲嘆反応を示すことが認識できた。これらを通し, 医療者は, 適切に子どもの予期悲嘆に気づき, 介入することの重要性が示唆された。

そこでがん専門病院看護師を対象に, がん患者を親に持つ子どものグリーフケアへの意識調査をしたところ, 子どもの予期悲嘆ケアの重要性は認識していたが, 子どもの死の概念・悲嘆プロセス等の知識不足, 子どもとのコミュニケーションの困難さ等を理由に, 実践が難しく, 子どものグリーフケア実践に向けての卒後教育を要望していることが明らかになった。そのため科研費で教育プログラム開発をし, 現在は, 北里大学看護キャリア開発センターにて医療者等を対象にした子どものためのグリーフセミナーを実施している。また, がん患者を親にもつ子どもへのグリーフケアとして医療者のみでなく, 子どもたちが多くの時間を過ごしている学校等をはじめ地域と連携し支援するモデル開発に取り組んでいる。

喪失に伴うグリーフは, 誰にでも起こりうる正常な反応であり, 病気ではない。私は, 子どもたちのグリーフからの回復力のすばらしさを実感し, 子どもの力を信頼することは重要であると考えている。しかし, グリーフを抱えている子どもを見守り, 必要に応じたサポートができる社会体制の整備は重要であり, 子どもたちが健康に成長発達していく社会になることを望んでいる。